playback
インタビュー

高齢者に対して新しい見方をした人物

ロバート・バトラー氏

アメリカで最も大きな影響力を持つ老年学者であり、65歳の人々が必ずしも人生の晩年にいるように見えたり、感じたりするわけではないことを調査した初めての人物である。

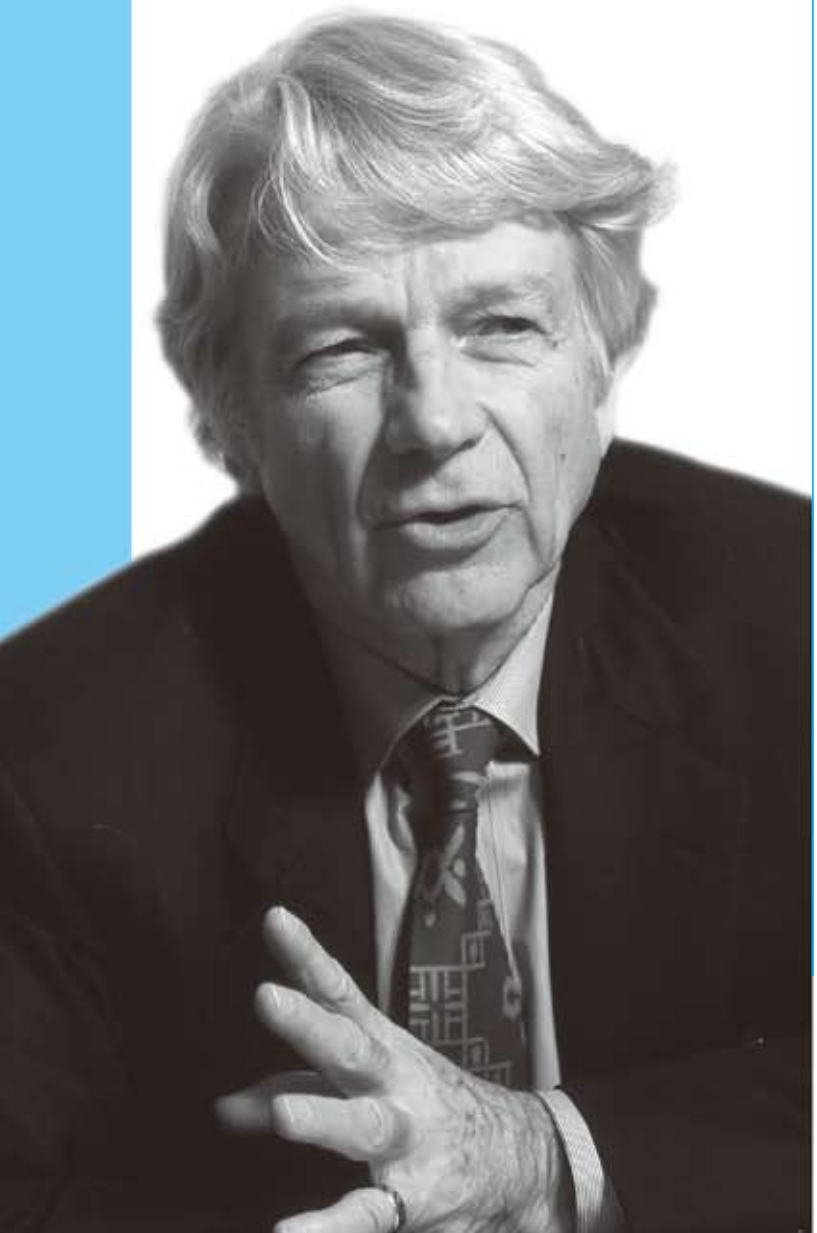
聞き手：**マイケル・ノーマン**　ニューヨークタイムズ・マガジン　1997年3月9日号

Q：あなたは高齢者に対する偏見を指す言葉として、「エイジズム」という新しい言葉を作りましたね。アメリカはまだ、高齢者を差別する文化のある国なのでしょうか?

A：アメリカほど、高齢者に対し辛辣な態度をとる国はないと思います。ある雑誌に高齢者を「欲深な老いぼれ」と呼んでいる記事がありました。それを見ても、やはりエイジズムはまだ存在すると私は思います。

Q：あなたはいつからどのように新しい高齢者像を形成してきたのですか。

A：従来は、高齢者調査と言えば慢性疾患を持つナーシング・ホームの入居者を対象にして行っていました。しかし、



The Man Who Saw Old Anew

1955年、国立衛生研究所に勤務していたとき、私たちは研究調査をする際に地域住民から意図的に健康な高齢者を調査対象に選んだのです。調査の初日から、私の中にあった、よぼよぼとした高齢者のイメージが吹き飛びました。

その後1963年に私は「実年齢の外見（The Facade of Chronological Age）」という論文を書きました。これは人生の新しいステージに関係する内容です。前期高齢者（young-old）はまだ元気で体が機能しており、後期高齢者（old-old）になるにつれて様々な病気や障害による症状が出始めるというものです。高齢でも健康なグループが存在するということは、以前から分かっていたと思います。ただ、その健康なグループが飛躍的に拡大したということなのです。

Q：いつ文化がその現実に追いつくのでしょうか?

A：私は、ベビーブーマー世代が社会を変化させると信じています。今、彼らの世代は中年期にさしかかっていますから、文化もそろそろ追いつき始めるでしょう。これからは、今より高齢な主人公の映画が出てくるでしょうし、高齢者向けの産業も注目されてくると思います。

Q：あなたはご両親が離婚したため、生後11カ月のときから祖父母と生活をしていますね。

A：はい。祖父母は養鶏場を営んでおり、私の医学への道はそこから始まったのです。鶏舎の端に、祖父が「病院」

と呼ぶコーナーを作って治療をしていました。医学への好奇心はそういうものを見ることで刺激されていったのだと思います。

Q：祖父はあなたが農場に来てから6年後に亡くなったそうですね。

A：私は当時7歳で、非常に困惑しました。そして、ホームドクターであったローズ医師の影響を強く受けました。彼の使命は自分の最善を尽くして人々に癒しを与え、可能な限り長く命が保たれるようにすることでした。

Q：子どものとき、あなたは自分の保護者が他の子どもたちの親よりも随分歳をとっていると感じたことはありましたか?

A：実年齢を比べれば、友だちの親よりも確かに年上だとは分かっていました。しかし祖父母は誰にも引けを取らないほど元気はつらつとしていたのです。祖母は、まずWPA裁縫室で働き始めました。その後、彼女はタイプを習い、秘書になりました。これらのことを始めたのは、彼女が既に高齢になってからです。当時私は自転車の修理や新聞配達をして、週に12ドル稼いでいました。祖母と私は、大変な時代を必死で生き残ろうとしている、劇団のメンバーのようでした。

Q：では、あなたは一般の人たちとはかなり異なる高齢者のイメージをお持ちだったのですね。

A：私はただ、祖父母ほど健康で、コミュニティの中に住み、活動的で働き者の高齢者が存在すると知っていた点で、非常に恵まれていたと思います。

Q：どの時点で、あなたは精神科を専攻しようと決心したのですか?

A：実は、私は血液学者になるつもりでした。でもインターンの期間が半分過ぎた頃、患者達は健康問題だけでなく、明らかに心理的、行動的、社会的問題を抱えていることに気づきました。また、私たちはエイジングについて何一つ知らないことにも。この二つの考えがインターンの期間中、私の頭から離れなくなりました。

Q：何か特別なことが起こったのですか?

A：St.Luke's病院で、担当看護士に叱りつけられたということがありました。ある72歳の男性が興奮状態にあったとき、私は当時主流だった、セコナールを処方しました。ところが、摂取後、男性は落ち着くどころか反対に、更に興奮してしまったのです。それから私は本を熟読し、脳にダメージがある高齢者の場合は、セコナールを与えるともっと興奮してしまうという説明書きを見つけたのです。「逆説的な薬物反応」です。私がこのことを知らなかったのは、コロンビア大学の授業中に私が寝ていたか、教授がそれに関する講義をしなかったかのいずれかだと思いました。とにかく、高齢期について私が知らなければならないことがあると思ったのです。それに、私の受け持つ患者の平均年齢は、医学生時代に見ていた患者よりずっと高齢でした。というのは、コロンビア大学では脳卒中や、たちの悪い病気の高齢患者を、「良い教材」とは言えないからという理由で市立病院へ回していたのです。その時代はずいぶん年齢差別がありました。私の教授が高齢者のことを言うとき「老いぼれ」という言葉を使っていたのを覚えています。

私は祖父母との特別な経験があったため、このような状況のなかではこのまま大学に残ることはできないと考えました。そして、さらにエイジングについて研究を深めたいと強く思うようになり、精神科を選び、老年学の道へ進んだのです。

Q：あなたは、「ライフレビュー（回想法）」の草分け的存在ですね。これはいつ始まったのでしょうか?

A：1955年、私はライフスパンに関する11カ年研究に参加していました。その当時アメリカ心理学会の統計的診断マニュアルで、回想する人を「（つまらないことを）しゃべり過ぎ」

と見なし、回想は老年精神病の初期症状であるとされていたことを知り驚きました。私は高齢者たちが自分の過去を語り、自分の悩みや不仲な兄弟などと向き合うのを見ており、ますますライフレビューの評価的側面の大きさを感じるようになっていたのです。それで、私はライフレビューという言葉を使い始めました。

Q：高齢者が自らの死期が近づきつつあると感じ、人生を振り返り始めるときの共通するテーマはありますか？　また、人間はどの時点で自らの死を考え始めるのですか？

A：「和解」です。兄弟姉妹との仲直り、血縁関係者との和解、配偶者との和解さえあります。

死については一生のうち、いつでも考えますが、特に危機が迫っているときに考えます。ショーペンハウアーは、「人はあるとき、現在は生まれてから何年経ったか、ではなく死まで何年あるかと考えるようになる。その時点が中年期の定義の一つであろう」と言いました。その時期から真面目に考え出すのです。死は強力な動機付けとなります。高齢者の心理療法の反応が効果的に現れる理由の一つには、死があると思います。20歳から40歳ぐらいの人は永久に生きられるという感覚でいますが、高齢者は、いい加減にやっている暇はないと分かっているのです。

Q：先日、私の父の誕生日パーティに集まってくれた高齢者の中で、死に関係するジョークを言う人が何人もいましたが、私たち50歳以下の人達は顔をしかめていました。

A：確かにそういうジョークのなかにはひやひやするようなのもありますが、高齢者が死に対処する一つの方法でもあるのです。死を笑い飛ばせるのですから。フロイトは、「ウィットは緊張や衝突に対応する一つの対処方法である」と言っています。

Q：こういった高齢者のジョークの多くは、私にはまるで理解できません。

A：1955年、高齢者に関する大規模な研究のメンバーだったとき、私はインタビューした最初の二人のことを良く覚えています。インタビュー手順として、死とセックスに関して突っ込んだ質問をすることになっていました。当時私はまだ28歳。どうして年上の人たちに「自慰行為をしますか、墓の準備はしていますか、死は怖いですか」などと聞けるでしょうか。私は本当に勇気を奮い起こして質問したのですが、その二人はすぐにその話題に飛び込んできたのです。その話をするのが楽しそうでした。このように、あなたのお父さんのパーティでの出来事と同じで、それは適応し、死の不安を解決し、生きていくための方法の一つなのです。彼らの行動は、対抗恐怖（counterphobic）であり、恐怖を直視しているとも言えるのです。

Q：つまり、歳をとると精神的に強くなれるということでしょうか？

A：いいえ、将来について、より現実的に考えるようになるのだと思います。また、同じことを知っている者同士で一緒にいると心が安らぐのです。

Q：あなたは今年70歳になりますね。歳をとることは、あなたが想像していた通りのものですか？ 何か驚いたことはありましたか？

A：私はこれまで、非常にラッキーだったと思います。大きな病気をしていません。人間は、自分が不死身ではないと理解する瞬間があります。これは「衰弱による自己同一性の危機（frailty identity crisis）」と呼べるかもしれません。人は重篤な病気にかかって、あるいは転倒で腰などを骨折して初めて、自分が衰弱するのを感じ始めるのです。死が自分に迫っていると自覚するとき、これが次の危機です。幸運なことに、私はまだ衰弱していませんし、死に直面してもいません。ですから、私はまだ本当の意味で根性を試されてないと思います。